



蔵 DE Books
としよだより

ほんとしおり

Vol.1

2016年3月発刊

蔵で本。

はじまりました。

「蔵に本があったらどんな感じかな」そんな小さな想像が膨らんで生まれた蔵DE Books。いろんな人の力をお借りして、矢板武記念の蔵に昨年秋よりオープンしました。ここは本を通して人と人が繋がる場所。たくさんの人に楽しんでもらえる嬉しのです。

矢板武記念館に足しげく通うようになって早3年。本町交差点付近は交通量が多く、歩いていると目立ってしまい、恥ずかしい。それにせつかくの休みだからどこかに遊びに行きたい。なんてことを、未だに頭の片隅で考えてしまいます。

でも、ひとたび蔵に入るとそんな考えはするすると抜けて、帰りたくない！と。この現象、私は勝手に「蔵マジック」と呼んでいます。

廃校になった小学校の机と椅子に体を落ち着け、気になる本に手を伸ばして読み進めるうちに、いつの間にか時が経つのを忘れ、せわしない日常の中でコチコチになった心がどんどんほぐれていきます。まるで別世界。

日に日に暖かくなるこの季節、どうぞ記念館まで足をのばしてみてください。そして蔵へ。ここでしか味わえないひと時を過ごしてみませんか。



(中央) 今回集まった本。関連本を含めて10冊。どれから読もうか迷ってしまう。
 (左下) 一週間前に降った雪。暖冬とはいえ2月は一番寒い時期。



真冬の植本祭 開催しました

本があれば寒くない

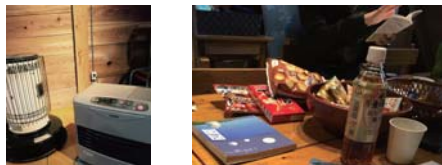


2月初旬。雪が溶け残る中、植本祭を開催しました。本の感想や面白さを自分の言葉で人に伝えるのは難しいことですが、難しいなりに深く掘り下げてみたり、他の人の本から新しい本の読み方を知ることができ、楽しいイベントです。今回で3回目ですが、残念ながらこれまで参加者ゼロ。今回初めて参加者を迎えることとなりました。外はまだまだ寒いけど、小さい蔵にストーブを点け、小さな机をくっつけて、和やかな雰囲気の中行われました。

今回みんなで持ち寄った本は左の通り。

今回のテーマ

- ・ 歴史
 - ・ 旅行
 - ・ 動物
- & おすすめの一冊
- としよがかり



(左右) 蔵を温めるストーブと、植本祭の様子。本について語るうちに部屋は熱気に包まれていく。

< 春のつばやき >



作 kana

- 12 ご案内
蔵のイベント情報／利用案内／寄贈について
- 11 おすすめ本
「百万回生きたねこ」
- 10 としよがかりの声 その②
カステラがカステラになるということ 第1話
- 8 としよがかりの声 その①
旅×本 第一回「道後温泉と夏目漱石」
- 6 本棚拝見。第一回 黒川保二さん
- 3 真冬の植本祭開催しました



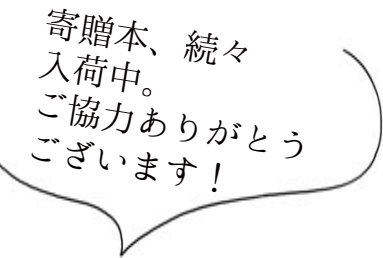
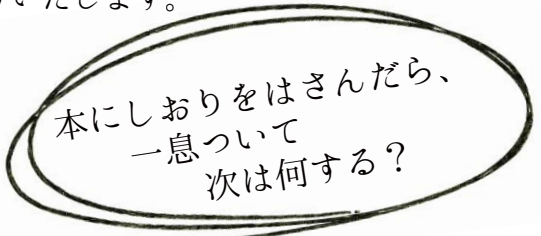
蔵DE Books としよだより
ほんとしおり
はじめました。

Vol.1
2016年
3月発行

～「ほんとしおり」について～

昨年秋にオープンした蔵DE Booksを、たくさんの人に親しみをもって利用してほしいという思いで作っています。

矢板武記念館の蔵を人と文化が交わる場所に再生することを目的とした蔵*武project。その中から有志数名が「としよがかり」として蔵DE Booksの管理、運営をしています。本好き、旅好き、カフェ好き、円谷プロマニア。ちょっと不思議なとしよがかりメンバーによる自由気ままな読み物や、本にまつわるあれこれ、そして蔵のイベント情報を楽しく元気にお届けいたします。



寄贈本総数
158冊(1月時点)



さてさて、どんな本が登場したかは
次のページへ

⑥ 「未来を変えた島の学校」
山内 道雄、岩本 悠、
田中 輝 著
(岩波書店)

としよがかり A



⑤ 「ことりっふ 四国」
(昭文社)

旅行の本

島根県の離島にある隠岐島前高校。人口減少や少子高齢化が進み廃校寸前のこの高校で、地域の過疎化を食い止めるべく、「島前高校魅力化プロジェクト」が始動した。今までにない取組に奔走し困難に立ち向かう、熱い大人たちと高校生の姿に思わず涙。多くの人に読んでもらいたいおすすめの一冊。

「る〇ぶ」、「まっ〇る」に代わる旅好き女子の必読ガイドブック。荷物に入れてもがさばらないサイズなのも便利。先日行った四国の旅で活用。瀬戸内海を思わせる濃い青の表紙が旅の気分を盛り上げます。「うどんが一杯300円」「てんぷらをのせるとさらに美味しい」なんて話を聞くと、すぐにでも行ってみたい場所、四国。

としよがかり S



② 「遠野物語 remix」
京極 夏彦/柳田 國男 著
(角川ソフィア文庫)

歴史、旅行、動物の本

遠野地方に伝わる風習風俗、伝説を記した「遠野物語」を京極夏彦が読みやすい文章で書いた本。どこかで聞いたことがある昔話の元ネタは「遠野物語」だった！「妖怪の話も多い」、「遠野に行ってみたくなる本」ということで、一冊で「歴史、動物、旅行」の3つのテーマを網羅。いろんな角度から読むと楽しさ倍増。関連本「ゲゲの鬼太郎」と共に。

参加者 Mさん



① 「図解文化財の見方 - 歴史散歩の手引き」
人見 春雄 編纂
(山川出版)

歴史の本

ふるさとガイドをされているMさん。文化財を案内するために活用している大切な資料。書き込み等もあり、勉強の跡が。ふるさとガイドの活動は知識の積み重ねがあつてこそ。年表や建物の構造が図解されていて、矢板市に数ある文化財も、これがあればさらに楽しめそう。文化財はツアーよりじっくり見るのがいいそうで、おすすめの史跡は川崎城跡。

持ち寄った本はこちら！



動物の本

⑧

「ブラフマンの埋葬」
小川 洋子 著
(講談社文庫)

としよがかり Y



⑦

「冬の本」
天野 祐吉 他 著
(夏葉社)

おすすめの本

瀕死の状態の得体の知れない動物を助け、「僕」は、「ブラフマン」と名付け、かわいがるようになる。タイトルから悲しい結末が予想され、それと対比するように心を通わせる「僕」とブラフマンの生き生きとした日々。失われていくものをただ放り出すのではなく、「埋葬」するように丁寧に慈しむ心を教えてくれる。自分の周りの大切な「何か」を思い浮かべながら。

和田誠イラストの表紙ときれいな装丁に惹かれて購入。

「冬と本」をテーマに、作家や芸能人、文化人など84人の著名人が書いたミニエッセイが並ぶ。冬の夜のあたたかい布団の中で子供と読む絵本、凍えそうな東京の真ん中で食べた熱々のおでん…。年々季節感が薄れ、冬らしさを味わいにくい昨今。毎年、本格的な寒さが来たら、本棚から取り出し、冬を噛みしめながら読むのがおすすめ。

歴史の本

④

「砂糖の世界史」
川北 稔 著
(岩波ジュニア新書)

としよがかり O



③

「読書について」
ショーペンハウアー 著
鈴木 芳子 訳
(光文社古典新訳文庫)

おすすめの本

歴史に興味をもつきっかけになった一冊。東南アジア発祥の砂糖がアレクサンダー大王の遠征で世界に広がり、16世紀の南アメリカで奴隷制による大量生産。その後ヨーロッパ人に文化を滅ぼされても砂糖だけは生き残り、英国労働者のカロリー源に…。たかが砂糖。されど砂糖。時代を遡るだけではなく、今につながる砂糖の歴史。

本は他人が書いたものであり、読書は他人に考えてもらうこと。限られた人生の中で読書にばかり時間をかけると、自分で物考える力を失う。「読書について」というタイトルでありながら、本を読んできた人ほど絶望的になる内容。本に限らず多くの情報に囲まれた現代の私たちにとっても、大きな警鐘になりそう。



※都合により今回は本棚に配架しなかった本があります。ご了承ください。

植本祭を終えて…
今回はバラエティに富んだ8冊の本が集まりました。参加者のMさんより、「刺激を受けました」との感想をいただきました。また機会があればこのような会を開催したいです。参加されたMさんありがとうございました。

本棚は、心を映す鏡なり。

本棚 拝見。

第一回
黒川 保二さん
(現 矢板市立泉小学校校長)

黒川先生は、としよがかりメンバ―の小学校1、2年生の頃の担任の先生。明るく、楽しく、元気にクラスを盛り上げてくれた先生。黒川先生の人柄の源流はどこにあるのでしょうか。



忙しい中、教え子の頼みならと快く取材を受けていただきました。ありがたい限りです。



遺伝子、宇宙から松尾芭蕉まで、ジャンルは様々。日当たりのいい部屋に置かれた本棚には家族の写真も飾られ、あたたかい雰囲気。

興味があるものとはとん気になる
文学からフィクション、科学、自然と幅広いジャンルの本が置かれています。梓にとらわれない能動的な「学び」の姿勢が伺えます。本棚をよく観察すると、同じ作家の本がズラリ。一人の作家が気になると、その作家の他の作品が気になるとのこと。山田太一と倉本総、そして星野富弘。山田太一が書いたお芝居を東京へ観に行ったり、群馬の富弘美術館へ出掛けたり。興味があることがあれば積極的に行ってみるそう。最近山によく行くそうで、登山に関する本も。南アルプスから、日本の高い山ベスト3を一望してきたそう。先生、教え子より若いです！

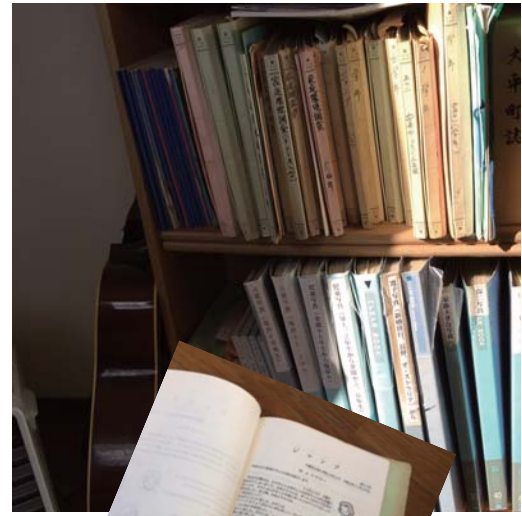
星野富弘の作品から母への思い
おすすめの本として取り出したのは星野富弘の作品集。その中で、体が不自由な富弘が母を思い描いた作品に感銘を受けたそうです。そこで、自身の母親が俳句を趣味にしていたことから、自分でも何か出来るのではと、母親の詠んだ句に添える絵を描き始めたそうです。日常の一瞬のきらめきを切り取った句から、先生が想像を膨らませて描いた作品の数々。作品の素晴らしさもさることながら、先生のお母様への温かい思いが感じられます。

神様がたった一度だけこの腕を動かして下さいたら母の肩をたたかせてもらおう風に揺れる
べんべん草の実を見ていたらそんな日が
本当にくるような気がした

星野富弘の作品「べんべん草」



星野富弘の作品(上)と、お母様と先生の作品(下二つ)。ささやかな発見を大切にしようとする気持ちが感じられます。



生徒の作文や写真をしまっているファイル(上)。背表紙に懐かしの学級だよりのタイトル「ジャンプ」の文字を発見。



(真ん中) クラス38人分の作文のファイル。読んでみると子供の頃のことを思い出す。(下) 帰りの会の時の写真。賑やかな声が聞こえてきそう。

的に何なのかを描いている所。その中に人の優しさが含まれている所。」と。ほんの二、三十年前は、体などにハンディのある人に対する配慮はほとんどなかったということ。少しでも人と違うところがあれば、周りにはそれを認めず、本人達もそれを引け目に感じ、自分らしく生きられない社会。そんな中で、どんな思いで生きてきて、何を乗り越えてきたかを描いた作品が多いそう。今は昔よりも多様性が認められていくとはいえ、まだまだな所も多い。震災の時も、被災者の大変さを分かっているつもりでも、その大変さはみんな違う。一人一人の声に耳を傾けるのが大事だと話してくださいました。

生徒との思い出が詰まったファイル
先生の本棚の片隅には生徒の作文や写真が大切にファイルされています。「今までに担当した生徒は350人くらい、部活などで関わった生徒も含め1000人。みんな覚えてる。」そう誇らしく話す先生にとって、生徒と過ごした時間は、どんな本にも負けない「宝物」なのかもしれません。

写真に残る生徒達の顔がどれもびのびしているのは、きっと先生の優しさに見守られて安心しているからなのでしょう。



(松山城)

さて、2日目の目的地である愛媛県松山は夏目漱石ゆかりの地です。若き日の漱石が教師として赴任した地であり、夏目漱石の代表作『坊っちゃん』の舞台でもあります。

上：讃岐うどん
下：栗林公園



としよ
がかり
の声
その①

旅×本

文/写真
赤塚 由実

第一回 道後温泉と 夏目漱石

はじめまして！趣味は旅行の赤塚です。旅先にまつわる本や作家さん、そして旅の様子を紹介していきたいと思います。

第1回目は四国旅行。四国と言えば、さぬきうどん！というイメージで以前から行ってみたい場所の一つでした。おいしいものを食べるために旅行するのって、とっても贅沢な気がします。



(上：松山名物の鯛めし)
(下：道後温泉)



食べて歩いて、また食べてというハードな1日でしたが、温泉で疲れを癒して、次の日に備えて英気を養いました。

まずは新宿から夜行バスに乗り、一路香川県に向います。旅行1日目は、うどんを食べ（朝・昼・おやつと3食うどん）、栗林公園を回り、金刀比羅宮に登りました。延々と続く階段の両脇に土産物屋が並ぶ金刀比羅宮。本宮までの階段の総数は、なんと七百八十五段！日頃の運動不足がたたり、本宮の奥にある奥社には行けませんでした。

3日目は、猫の聖地「青島」を目指したのですが・・・。天候不順で船が欠航。リベンジを誓って四国を後にしました。とっても濃い3日間でしたが、いつの日かまたおいしいうどんを食べに行きたいです♡

『坊っちゃん』から

「ほかの所は何を見ても東京の足元にも及ばないが温泉丈は立派なものだ。折角来た者だから毎日這入ってやらうと云ふ気で、晩飯前に運動旁出る。」

まずは名物・鯛めしをいただき、その後松山城を見学。土産物屋さんを覗くとみかん・みかん・みかん。宿に着くと蛇口からみかんジュース・・・さすがみかんの産地です。夜の道後温泉は建物が淡く光り、とても幻想的でした。ジブリファンの私としては、『千と千尋の神隠し』を思いだし興奮してしまいました。道後温泉には、夏目漱石に関する資料が展示してある「坊っちゃんの間」があり、そこも見学して来ました。

○ おすすめ
本

「100万回
生きたねこ」
作・絵 佐野 洋子
(講談社の創作絵本)



作者紹介
佐野 洋子
1938年6月28日-2010年11月5日
北京生まれ。武蔵野美術大学デザイン
科卒。絵本作家、エッセイスト。

蔵には無いけど、
いま話題の関連本

「100万回分の1回のねこ」
(講談社)



13人の作家による
「100万回生きたねこ」
トリビュート短編作品集
続々重版中!!

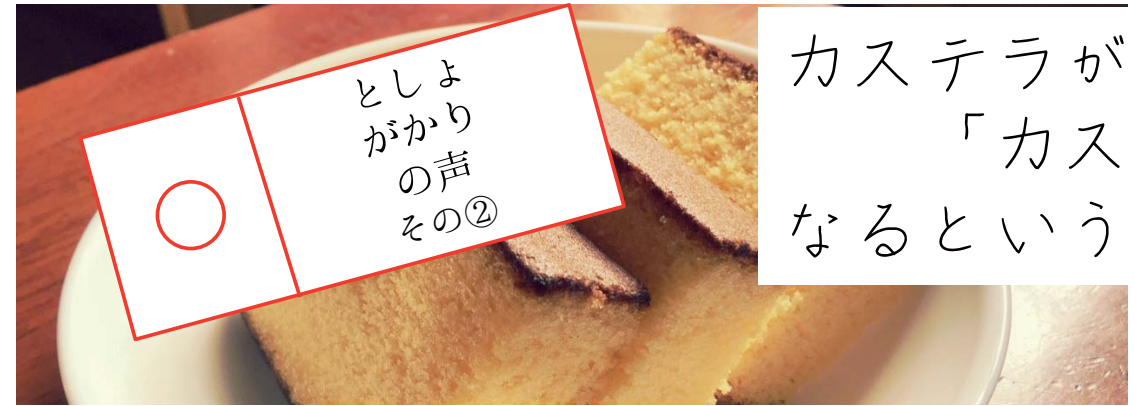
読むたびに泣いてしまう人多数。
大人のための名作!!

あらすじ
100万回生きたねこは、王様にも、
船乗りにも、手品師にも、泥棒にも愛
され、みんなねこが死ぬと泣きました。
でもねこは、みんなのことがこれっ
ぽっちも好きではありませんでした。
そんなねこが初めてあるねこを好きに
なって…

かけがえのないものは…
私たちは100万回も生きられないけ
れど、このねこは私たちの心のどこかに
いる、ちょっと傲慢なもう一人の自分な
のかもしれない。
人生って何？誰かを好きになるってど
ういうこと？本当の幸せとは？
人生の中でつい見失いがちになる、自
分にとって本当に大切なことに気づかせ
てくれる一冊です。

まだまだあります。
こんな本。

- ・「着物の悦びーきもの七転び八起き」 林 真理子 著 (新潮社)
着物に縁がなかった作者が着物にはまって失敗したり、恥をかいたり。それでも楽しくて…
着物入門のきっかけになりそうな一冊です。
- ・「声を出して読みたい日本語」 斎藤 孝 著 (草思社)
歴史のなかで語り継がれ生き残ってきた名文には、そこにしかない独特のリズムや響きが
あります。名文から日本語の良さを味わってみませんか。



カステラが
「カステラ」に
なるということ

文 小野 三四郎

第1話

物語はつかみどころのない不思議な生き物だ。一つの作品に対して様々な感想、評価があり、その在り方は読み手の呼吸にあわせて姿を変えていく生物のようだ。「物語」ってなんだろう…と、改めて考えてみると色々な疑問がわき上がる。物語と、日常の出来事との違いは何か。例えば、朝起きてから夜寝るまでの行動を順番に書いたものは物語と言えるのか。「現実で起こったことや、そのひとつひとつの繋がりに対して、「結末ありきで描か「終わりがある」というのが物語の特徴れたもの」を物語と考えても良いのか。もしかすると、の1つかもされない。しかし、そういった定義付けの話は物語を楽しむ上でそれほど重要ではないし、堅い話になるので避けることにする。ここでは定義云々の話よりも、物語それ自体が持つ魅力や、それが人に与える影響について考えたい。

私が子供だった頃の話をしてみよう。文字を読めるということに気づいたのは、4歳くらいの子だったと思う。双子の野ねずみが大きなカステラを作る物語だった。絵本のページには、大きなフライパンで調理されている黄色い物体が描かれている。絵本を読んでも母の声を聞くことで、ようやく私はそれを「カステラ」だと理解していた。けれど、その日は勝手が違った。いつもは耳から入ってくる文字を目で追っていくと、じわりじわりとイメージが膨らんでいく。そうして「黄色い物体」は、頭の中でカステラになっていった。甘くてふわふわで、大きなカステラだった。平面の中に描かれた物体が、一転して、豊かな彩りを持って動き出したような不思議な感覚を味わった。自ら文字を読むことで、目の前にはない世界を自分の中に思い描くことができる。想像を掻き立てる力をもって、読み手に何かを伝えたり、感じ取ってもらったりすることができ、それが、物語の魅力の一つではないだろうか。次回以降、物語と現実との関係に触れながら、語ることや語られることが人に与える影響について、考えていければと思う。

3/20(日)～ 3校合同 ぼ蔵の写真展
4/10(日) in 矢板武記念館



矢板高校、矢板東高校、矢板中央校の
写真部・新聞部の作品を展示します。

3/26(土) 小さな蔵の映画祭 @西蔵
10:00開場 「メリーポピンズ」
10:10開始



シダレ桜の満開の時期(だいたい3月下旬～4月初め)
の週末、サクラサク*カフェをオープン!



ほかにもイベント企画中。
詳しくは蔵*武project
Facebookページをご覧ください。

○ ご案内

蔵
の
イ
ベ
ン
ト
本
だ
け
じ
ゃ
な
い
情
報

蔵*武project
Facebookページ
はこちらから。



蔵DE Books利用案内

- ・入館料100円。
(蔵で飲み物の提供あり)
- ・貸出し可。(一人2冊。2週間まで)
- ・利用時間:
4月～10月
9:15～15:30
11月～3月
10:15～14:30
(注)片付け時間を含む。
- ・休館日は月曜、火曜、祝日の翌日及び、
年末年始(12月27日～1月5日)
- ※駐車場はありません。
市役所駐車場をご利用ください。



本の寄贈について

受付先:矢板武記念館受付
※スペース等の都合により、本を本棚に
並べられないこともあります。
※公序良俗に反するもの、宗教や思想色
の強い本を並べることは出来ません。

まちライブラリー
始めました!!



まちライブラリーとは、
まちのあちこちに本棚
を置き、本を通して人
との縁を繋ぐ活動です。
全国で展開しています。

本に付いたメッセージカードが次々に本
を読んだ人たちの想いを伝えていく。



蔵DE Booksの全ての本には
まちライブラリーのシール
を貼付。

蔵*武project: 矢板武記念館の蔵を人が集まる場所に
再生することを目的に、矢板武塾卒生を
中心とした20～30代の若者達が活動。

お問い合わせ: p.kuratake@gmail.comまでメール